

少女生みの母(下)

永代美知代

彌生は水谷家の御門の傍に、母様らしい丸鬚姿を見つけて、ハツとして暫し横町の何處かの板塀に寄りかゝつてゐたが、思ひ返したやうに急ぎ足で水谷の門前に戻つて来た。と、もうそれらしいお姿は見えなかつた。

「何て馬鹿なんでせう私は！」

唇を噛んで口惜しがつたけれど、今さら仕方が無い。

綺麗に掃除の届いた敷石を踏んで、突き當りの玄関に立つて電鈴を押す彌生の手は震いた。

「あの奥様が被在いましたら、彌生が参りましたつて、さう仰有つて頂戴な。」

島田の小間使が、幾度と無く首をかしげて聞きとる程、彌生の言葉は口籠つた。

もう四谷の母様の事ばかり思ひ續けて、

「オヤ、彌生ちゃんかい！」

彌生が電鈴を押すと、直ぐ御自身で取次ぎにお出になつた母様は、何

だか落着の無い容子で四周をお見廻しなすつた。

「お前また來の？」

彌生は思ひ掛けもない思ひをした。

「會つたつて別にどう仕様事も出来ないお互の身の上なのだから、ねえ彌生ちゃん、お前にはまだお解りぢやないかも知れないが、浮世の義理と云ふものは、なか／＼難かしい、昨日もうあゝして會つた以上、もうそんなに度々來ない方が、お互の爲めだ



た。(完)

「オヤ、被入やい！」
元氣の好いお聲で呼びかけて、母様は懐かしげに見入る彌生の手を執つて、奥へお連れなすつた。

「何時のまにか大きくなつて……」
折々斯う仰有るばかりで、母様は別段しんみりしたお話もなさらなかつた。暫らくはちつと座つてゐたが、やがて、

「どうも大變御邪魔いたしました、私今日はもうお暇致しませう。」と彌生が挨拶しかゝると、

「まあ好いちやないの……」

斯う母様は一應おとめになつたけれど、今一度彌生が歸りさうにすると、それでも強ひてはおとめにならない。

「では随分氣をつけてね、お大事になさいよ」

「有り難う、どうぞもう」

彌生は玄関を出てからも、母様に申上げたい何一つ云ふ事も出来ないのを念がつた。

その次の日、彌生は學校へ行くために家を出ると、

から——ねえ彌生ちゃん、私の云ふのが解つたら、早く、誰にも見つかからない間にお歸りなさい、ね、解つて？」

「解りました。」

はら／＼と涙をこぼして、彌生は唇を噛んだ。

「堪忍してお呉れ、折角來たものをね、でも今に解る時がありませう、ぢやさよなら。」

母様はその儘周章てたやうに奥へ入つておしまひなすつ